

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。ただし、問題の都合上、本文に一部改めた箇所があります。

待ちに待った順ちゃんからの電報がきた時、私たちは玄関にいた。おねえさんは会社へ、私は学校にこうとして。

配達さんの手にあるのが、外国電報とわかったとたん、私は「わっ……」と声をあげた。

「おねえさん、来た！ 順ちゃんからよ！」

おねえさんは、私がさわぎだてる時のくせで、ちよつと眉をよせてみせ、そのくせ、配達さんには、あいそよく笑って、

「御苦労さま！」

電文には、「Arriving Saturday. PAA Flight 1. Jun.」(「土曜日PAAフライ」(「土曜日で着く。順」の意))とあった。

「フライトIって、なんだろう。」と私はせきこんで言った。

「飛行機のナンバーよ。それで時間がわかるのよ。あたし、きょう、交通公社(旅行業務をあつ)で聞いてみるわ。さあ、いよいよやってくるのね！」

静かな姉も、さすがに興奮したように言って、私たちは、十月はじめのその朝、足どりも軽く駅にいそいだ。

その夕、おねえさんが帰って、順ちゃんの飛行機は午後十時十五分着とわかった。私には、それまでの二、三日が、ワクワクの連続だった。とにかく、順ちゃんといえ、私たちにとっては、まったくくべつな存在だったから。

私が順ちゃんについてもっている、最初の記憶は、私の六つの時のできごとだ。

私は、その時、夢中で生け垣のすきまから、となりの家をのぞいていた。少し前まで空き地だったその場所に、新しい二階家がたつて、そこへ奇妙な一族がひっこしてきたのだ。年とつた(と私には思えた)男女と、一人の若者(これが、つまり、その時十一だった順ちゃん)であった。かれらは、私にわかる日本語でも話したけれど、突如、異様な叫び声に似たことばでしゃべりだすことがあった。また、やることがすべて、私の家とはかわって見えた。

私は、ひまさえあれば、裏の生け垣からその家の生活を監視した。ある日、またまた熱心にのぞきこんでいると、縁側に立つて

いた若者が、まっすぐ私を見つめはじめた。私の顔は、モジャモジャのムベ(植物名)のつるにかくれていたから、私は若者に私が見えるとは思わなかった。しかし、かれの目は、じっと私に注がれている。そのうち、かれは、「ピーキュー」というような叫び声をあげた。私は、こわくて動けなくなった。若者は、ゆっくり庭におりてくると、鼻のくつつくほど私に近づいて、

「なに見るんだ！」

私は、わっと泣きだして、うしろのドブにひっくりかえった。両方の家からおとながとびだしてきた。

これが、両家のシンコウのはじまりだった！

もちろん、これから書くことは、私が大きくなるにつれて、だんだん知ったことだけれど、順ちゃんたちは長い外国生活から帰ってきた人たちだった。順ちゃんがマミーとよんでいた三宅夫人は、アメリカ生まれの二世、ダディーとよんでいた三宅さんは、東北出身の会社員で、アメリカ勤めをしていたころ、結婚して、順ちゃんができた。三人は、アメリカや日本や濠洲(オーストラリア)や満洲(中国東北部の旧地域名)を経めぐって、戦争が本格的になったころ、ダディーの希望で、また日本へもどってきた。

ひっこしてきたころ、マミーは、ふつくらした、かわいい感じのおばさんで、くるくるとじつによく働いた。

「あの人は、日本生まれより日本的だな。」

と、国文学の教師だった私の父が、よく言った。

「でも、あの御主人のサービスをごろんなさいよ。」と、母は、やり返した。

マミーも働き者だったが、ダディーの勤勉ぶりにも驚かされた。夏冬、朝は六時におきて、水道がなかったから、まずタンクに一日分の水をくむ。庭をひとまわり。枯れ枝を集めて、薪の束をつくる。燃料も不足しはじめたところで、私たちはよく順ちゃんのたぐおふろをもらいにいった。また、三宅家のサイエンには、いつも青い物がたえなかった。

ダディーは若いころ、きつと好男子だったにちがいないと、母などよくうわさしたが、そのスマートの紳士の口からズーズー(東北地方の方言を、その発音からこのように呼ぶ)が出るので、私たちはおかしかつた。

みょうな話だけれど、戦争がなかったら、私たちは、あれほど親しくならなかったかもしれない。防空演習に出て、いじ悪い人

たちのさし図で、マミーが屋根の上に乗せられ、よくわからない口で、「敵機二機東方上空にあらわれ……」とやらされるのを見て、私の母はおこってしまった。マミーはカイランバンも読めなかったから、隣り組(戦時中に作られた地域住民の組織)の組長になると、ほんとに難儀(苦勞すること)したが、「だいじょうぶ、私がついてます。」と、母は姉のようにかばってやった。

たべ物がいよいよ乏しくなってくると、バタ(バター)やお砂糖で育ったマミーは、たちまち、梅ぼしのようにしなびはじめた。それは、子どもの私の目にもいたましい光景だった。それでも、マミーは、ダデーをおいて、いなかへいこうとしなかった。精神的なショックも手つだったのだろう。戦争のおわるころには、マミーの顔は、右半分がピクピクひきつっていた。私の父母を驚かしたのは、そのころでさえ、お隣りの三人の口からは、愚痴一つこぼれなかったことである。

「えらい人たちだな。」と、父は言った。

戦争がおわった。何もかもが逆になった。もと町会長が小さくなって街を歩き、アメリカ軍人家族の自動車が三宅家の前に横づけになったりした。英語のできる人はひっぱりだこだったから、マミーは女中さんを雇って、働きに出るだろうと、家では話した。ところが、そのけはいもなかった。ただ一時、マミーはアメリカ軍人の家族にお花を教えはじめた。が、その時も、お礼をお金でなく食糧(しよく)でもらったのは、ちょうど私の父が、病みはじめたからにちがいないと、母はスイリヨウした。とにかく、マミーは、裏口からやってきては、バタだのお砂糖だの、有無を言わせず、おいていってしまうのだった。

それから三年、私たちは、三宅家の人たちに支えられて生きてきたみたいだ。第一に、私の父が亡くなった。その後二年で、姉が学校を卒業したら、がつくりしたように、母も父のあとから逝った。私たちは二人になった。幸い姉は、マミーにしこまれて、英語もタイプ(タイブライター)もできたから、すぐ仕事が見つかった。そこで、家の一部を人に貸し、私は小学校から帰ると、夕方まで三宅家にあずけられるという生活のセツケイも、マミーと姉の間でたてられた。

戦後のひどいところを通って、また三宅家はアメリカに渡った。マミーや私の「理想の男性」順ちゃんを乗せた船がだんだん遠ざかっていくのを、十二の私は、泣いて見送った。

すぐ帰るといって、家も売らずにいったのに、それから九年、三宅家では帰ってこなかった。順ちゃんは、大学を出て、ダデーの関係している日本のボウエキ会社にはいつていた。だから、今度の東京転勤になるというたよりに、私たちは歓声をあげた。

「ねえ、あのころ、私も若かったからわからなかったけど、あのダデーって人は、よっぱどがんなんだわね。」姉は言った。「どうしても自分の子を日本人にしようってのよ。」

順ちゃんのつく日は、あいにく、霧がたちこめていた。爆音が大きくなったと思うと、もうその大きな飛行機は、滑走路を私たちの方へすべってくるところだった。

私は送迎所の手すりからのりだして、窓だけ明るい飛行機を、じっと立っていられない気持ちで見つめていた。あの中に順ちゃんがとじこめられている！ すぐタラップが飛行機の胴中にくっついて、係員らしい人が、上ったりさがったりしてから、やっと乗客たちが、出口にあらわれた。一人出てくる毎に、どこかで声があがった。十五、六人めに、うす水色に見えるコートに、あさ黒い顔の青年が、照明の中にうきあがった。

「わア順ちゃんだ！」B間髪を入れず、私はどなった。

「およしなさいよ、そんな声だすの。まだよくわからないじゃないの。」

でも、私の声は、もうとまらなかった。だって、順ちゃんが、手をふったのだもの。

「順ちゃあん！」私も手をふった。

姉も声をかけた。いま、おとなりに住んでいる板倉さんの人たちも呼んだ。

順ちゃんは、タラップをおりてくると、うれしそうに笑いながら、私たちの足下まで来て、手をふり、それから、税関の中へ消えた。

私は、もうはアはアになって、姉の手をひっぱって、税関の出口の階段の上へまわった。

ジリジリする二十分がすぎて、ケンサのすんだ四、五人が出てきたが、その中に順ちゃんがいいた！ まあ、ダディーにそっくり、と私は思った。順ちゃんは、階段をかけあがってくると、そこに立ちならぶ人垣にざっと目をさらし、笑顔でまっすぐ私のところへやってきて、

「ヤス……」

「あら、あたし、とも子よ！」私は、ぎょうてんして言った。私の耳にも、私の声が悲鳴にきこえた。

順ちゃんは、正直にぱくつと口をあけ、

「え、とも子こんなに大きくなったの！」というまに、順ちゃんの目は、私のななめうしろに立っている、ひつつめ髪（無造作にゆつ）
（た女性の髪型）のおねえさんをさがしてあてていた。

「ヤス！」順ちゃんは、私のわきをすりぬけて、おねえさんの手をとっていた。

みるみるうちに、おねえさんの目に、涙がいつぱいにたまった。

もちろん、私には……、その時、おねえさんの頭を去来した、いろんな思いが、わかった。戦争のこと、両親の死、それから三宅家のさしのべてくれたあたたかい手。

でも……、同時に私には……、この再会のシーンは、ショックだった。

おねえさんは笑って、すぐ涙を拭くと、順ちゃんを、かれが、これからドウキヨする板倉家の人たちに紹介した。そして、私たちは、にぎやかに家に帰ってきた。

その晩、私はよく眠れなかった。

なんて思いがけない、へんてこなことになってしまったんだろ、と私は思った。私は、^④それまで勝手に順ちゃんを、私のプリン

ス・チャーミング（おとぎ話でシンデレラと結婚する王子）にきめていたんだ。順ちゃんは、眠り姫（王子のキスで目をさます）の私の目をさましに、日本に

やってくるはずだった。それなのに……ことによったら、あの時、十七だった順ちゃんには、二十二のおねえさんが、初恋の人だったんじゃないかな……。

つぎの朝、私はいつもの日曜日のように、十時には、おふろ場の裏にタライをもちだして、一週間分の洗濯をしていた。万事、

おねえさんのきめた時間割りどおりだった。順ちゃんが、首にスウェーター（セーター）をひっかけるというケイソウで、木戸の上から顔をだしたのは、十時半ごろだった。

「ハアイ、とも子！」順ちゃんは、きげんのいい笑顔で言った。

「おはよ！」しかし、私はヒニクをとばさずにいられなかった。「けさは、まちがえなかったわね。よく眠れた？」

「うん、さっきまでぐっすり。だって、何十時間とんだんだ？」そして、木戸をあけてはいつてくると、「日曜に洗濯かい？」

「だってきょうしなけりや、いつするの？」

私は泡（あわ）の上にうかんでいる下着類を、かれの目にとどかないところにつつこんだ。

「かわいそくに。」と、兄らしく言つて、「ヤスは？」

^⑤「そら、きた！」と、私は思った。

「あつちよ。もうお掃除すんだでしょ。」

順ちゃんは、またあとでねというような目顔で、庭の方へまわっていった。たちまち、茶の間の方角から、おねえさんの明かるい笑い声がおこった。

それから、ああ、私の世界に、なんという価値のテントウがおこったのだろう。

私は、それまで、私の家の中心だった。なるほど、おねえさんは万事、家の中をぎりもりして、寝るも起きるも、おねえさんのさしずどおりではあった。

「だって、少しでも規則的にやってエネルギーセツヤクしなかったら、私の細腕で私たちの生活もきれないわ。そのかわり、あなたが卒業して、自分で生活できるようになったら、あなたは、あなたの自由よ。責任もって、あなたらしく暮らしてちょうだい。だけど、それまでは、おねえさんの言うこと聞いてね。」と、おねえさんは言うのだ。

私のために青春をなげうってしまったとも言えるおねえさん。^⑥頭をかきつきりひつつめて、黒っぽい服を着て、おねえさんは、三十一になつてしまった。「あなたといっしょに、私も結婚するわよ。」と、おねえさんは笑うのだけれど。

でも、なんとなく、私は、それがあたりまえの気がしていた。おねえさんは、私のためにあるような気がしていた。

それが、いま、完全にみそつかすなのは、私だった。順ちゃん、形式的な板倉さんとの交渉をめんどくさがって、朝に晩に裏からやってきて、「ヤス、ヤス」のレンパツだった。¹²理解者を得て、おねえさんが日に日に、明るくなり、若がえるのは、だれの目にだってわかった。

それにしても、順ちゃんも妙な人だった。ちつともアメリカ式じゃない。少くとも、私たちのいうドライじゃない。むしろ、古風だった。おねえさんに対するサービスなんかときたら。それは、おねえさんのコブである私にも、もちろん、やさしくはしてくれたけれど……、私がまん中になって歩いている時など、私の頭ごしにかわされる、たのしげな、したしげな会話を、私は何度かまんしなくちやならなかつたろう。私は、時どき、心の中でみにくい悪罵（口汚くの）^⑦を二人になげつけたりした。

「三十一の女と二十六の男なんて、グロテスクじゃないの！」

^⑧私は、腹いせのように、私の卒業論文に熱中した。テーマは、「女子日雇労働者の労働状況」それから、就職だって、自分の手で片づけてみせるから！ 私は、寒い十二、一月を口数も少なく、かけまわった。

いく晩か徹夜して、やっと卒論をしあげて、二、三日すると、私は身心ともからになって、くたくたという気がした。そして、とうとう、ある夕、ごはんもたべずに寝こんだ。ひと眠りして、汗びつしよりかいて、夢ともうつつともなくうつらうつらしていると、茶の間に順ちゃんがきたらしい。

「とも子は？」

「寝たのよ。かぜらしいの。」おねえさんが言った。「ねむったから、しずかにしてね。ここしばらくむりがつついたから疲れたんでしょ……、カキモチ焼く？」

「うん！」と少年のように。

カタコト、家庭的な音がして、やがて、ぷーんとおもちの焼けるにおいがしてきた。

おねえさんが、しみりとはじめた。

「ね、順ちゃん、いつかあなたにお願いしようと思つてたんだけど、これから少し、とも子を外につれだしてよ。さっきアスピリン（薬品名）のましたら、すうすう寝こんじゃって、その寝顔見てたら、かわいそうになっちゃった。^⑨あたしったら、まるで清教徒に育てちゃって……」

「なんだか、小さいころとずいぶんかわったね……」

「ちがうのよ！」おねえさんの声が、大きくなった。「焼けたわ。」

ボリボリ、カキモチをかじる音がおこった。

「少し前まで、もつと明かるかったの。もつとわがままで……かわいかったの……」

私の目から、お湯のような涙がごろりおちはじめた。

「なんだか……あなたがきてから、かわったみたい……」

「なんだい、ぼくのせいにして！」

「でも、そうなんだもの。いままで、ふたりつきりで、まあ、あの子だいいじにつて育ててきたでしょ？ だのに、このごろは、のけ者って気がするんじゃないかしら？ 今度、かぜなおったら、ダンスにでもさそってよ。」

また、ボリボリがはじまった。

「いや、これから、気をつけるよ。なんだか、まだ子どもみたいな気がしてしかたがないもんだから……」

「子どもだったって、もう二十一よ。」

「……とも子、おどれるのかい？」

「じょうずらしいわよ。このごろは、体操の時間にやるんじゃない？」

「ふん、体操で？……」

私は、頭のなかがクルクルまわって、

「私のだいたいな問題、カキモチたべながら論じないでよ！ 同情なんかしないでちょうだい！」と、ふたりのところへどなりこんだ錯覚さえもった。

その晩から、私は高熱をだし、ひと月寝た。夜と昼の見さかいかもつかない二、三日がすぎて正気にもどった時、私は、おねえさんの狂気じみたカンピョウぶりに、びっくりしてしまった。おねえさんは、十年一日と守ってきた日課をかなぐりすてていた。会社も休んだし、乱費もした。ふしぎなことに、私は、十年とつたようなおだやかな気もちになって、そのおねえさんを見るこゝとができた。「かわいそうなおねえさん。」私の病気を知ったマミーからは、毎日のようにコウクウビン¹⁴がきて、枕もとにたまっていた。それには、さりげなくニユーヨーク郊外のおそい春のようすなどが書いてあったが、何か自分のむすこの心なしをわびているような調子があるような気がして、私にはしかたがなかった。

私、なにか、とんでもないこと、うわ言で言ったのかしら、私は思ったが、そんなこと、どうでもいいと思った。

はじめて、からだをおこした日、順ちゃんは私を抱いて、縁側の籐いすまでつれていってくれた。

一月ぶりの日光がしみわたって、からだがうきあがりそうだった。

「どんな？」おねえさんが聞いた。

「いい気もち……、このまま、天国までのぼっていきそうだ。」

「ばかね。」天国にいく私をひきとめるように、おねえさんは、わきに坐^{すわ}って私の手をにぎっていた。

「もうすぐピンピンだよ。なおったらね、とも子、ダンスにでもいこうか。」順ちゃんが、わきからのぞきこみながら、言った。

「順ちゃんたら！」私は、ほんとにおかしくなってしまうて、キャツキャツと笑いだした。「いやだわ、カキモチくらいでバイ¹⁵シュウされて……」だいじょうぶよ、あたし、やっとこれで小学は卒業しました。」

(石井桃子「春のあらじ」)

問1 線部1と15のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 線部A「有無を言わせず」(4ページ)、B「間髪を入れず」(5ページ)とありますが、この言葉の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A 「有無を言わせず」

A 厚かましく

イ 強引に

ウ 無言で

エ こつそりと

オ 気前よく

B 「間髪を入れず」

A 即座に

イ 我慢できず

ウ 大声で

エ 大喜びで

オ 髪を振り乱して

問3 線部①「ちょっと眉をよせてみせ、そのくせ、配達さんには、あいそよく笑って」(2ページ)とありますが、これは

どういうことを示していますか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

A おねえさんは私に困ってしまったので、配達さんに同意を求めるように笑いかけているということ。

イ おねえさんは私にいらだちを感じたが、配達さんには姉妹の不和を悟^{さと}られまいとしているということ。

ウ おねえさんは私のことをたしなめたが、他人への礼儀は忘れず、配達さんをねぎらっているということ。

エ おねえさんは私にうんざりしたので、気持ちを落ち着かせようと配達さんの方へ顔を背^{そむ}けているということ。

オ おねえさんは私をにらみつけたが、配達さんのいたことに気がつき、あわててごまかしているということ。

問4

——線部②「戦争がなかったら、私たちは、あれほど親しくならなかったかもしれない」(3ページ)とありますが、これほどのようなことをいつているのですか。その内容の説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 戦争中の困難な状況で私の母がマミーを助け、その恩を返すように三宅家が戦後の困難な状況で私の家を助けるなかで、両家に特別な結びつきが生まれたということ。

イ 戦争中でもマミーたちはいつも勤勉で、苦しい生活にも全く不平を言わなかったため、私の家族は三宅家の人たちに、特別な敬意を払うようになったということ。

ウ 戦時中、日本語が不自由だったマミーを私の母が助けたことが縁となって、戦後は私の姉が英語を教わり、言語の壁をこえた相互理解が生まれたということ。

エ 戦争に勝つためには、海外帰りの者であっても関係なく、一丸となって敵と戦う必要があったため、私たちと三宅家の間には強い協力関係が生まれたということ。

オ 戦争というものは、どんな立場の人間にも等しく食糧不足をもたらしたので、大変な状況を生き抜くためには、隣人同士

問5

——線部③「何もかもが逆になった」(4ページ)とありますが、これはどういうことですか。マミーの立場に則して六十字以内で説明しなさい。

問6

本文中の で囲まれた箇所(5～6ページ)の私の順ちゃんへの思いを八十字以内で説明しなさい。

問7

——線部④「それまで勝手に順ちゃんを、私のプリンス・チャミングにきめていたんだ。順ちゃんは、眠り姫の私の目をさましに、日本にやってくるはずだった」(6～7ページ)とありますが、これに対して順ちゃんは私をどのように見ていますか。それを端的に表した一文を探し、はじめの七字を抜き出して答えなさい。

問8

——線部⑤「そら、きた！ と、私は思った」(7ページ)とありますが、なぜ私は「そら、きた！」と思ったのですか。その理由を三十字以内で説明しなさい。

問9

——線部⑥「頭をかつきりひつつめて、黒っぽい服を着て、おねえさんは、三十一になってしまった」(8ページ)とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア おねえさんはわざわざ男性の関心をひかないような格好を長年し続けてきた結果、実際の年齢以上に老けて見えるようになってしまったということ。

イ わがままな妹を甘やかさずきびしくしつけようと、おねえさんはすきのない格好をし続けたために、男性に相手にされず結婚しそびれてしまったということ。

ウ 戦争や両親の死に対する悲しみを表す服や髪型を長年してきたことで、おねえさんは同世代より大人びて見えるようになってしまったということ。

エ 姉妹二人だけの生活のなか、おねえさんは自分のことを後回しにし、おしゃれもせずに質素な生活を続け、恋愛もせずいい年になってしまったということ。

オ おねえさんは異性とおつき合いをする経験もなく、わき目もふらずに働いてきたために、本人の意志に反してかたくなな大人になってしまったということ。

問10 — 線部⑦「グロテスク」(8ページ)とありますが、この言葉の意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 軽薄だ イ 非常識だ ウ 不気味だ エ 横暴だ オ 下品だ

問11 — 線部⑧「私は、腹いせのように、私の卒業論文に熱中した」(8ページ)とありますが、この時の私の心情を五十文字以内で説明しなさい。

問12 — 線部⑨「あたしったら、まるで清教徒に育てちゃって……」(9ページ)とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア まだ学生の妹に変なうわさがたたないように、自分も結婚せず、妹にも男性との交際をさせなかったということ。
イ 二人の生活を支えているのは自分の収入なので、学生の妹を自分のいいなりにして、がまんさせてきたということ。
ウ 両親を失い、日々の生活はきびしいので、妹に自分が決めた生活規則を守らせ、自由にさせなかったということ。
エ 学生の妹は卒業論文や就職活動でいそがしい様子だったのに、無理に家事の手伝いをさせてしまったということ。
オ まだ子どもでわがままな妹に、立派に自分で生活できるようになるように、厳しい規則を課してきたということ。

問13 — 線部⑩「だいじょうぶよ、あたし、やっとこれで小学は卒業しました」(11ページ)とありますが、これはどういうことですか。本文全体をふまえて、百字以上百二十字以内で説明しなさい。

注意：「、」「。」「」「」「」も一字に数えます。

11	6	1
12	7	2
13	8	3
14	9	4
15	10	5

問 3

問
5

[illegible]

問 7

[illegible]

問 9

問 10

問
11

問
12

[illegible]